知事コラム　佐竹敬久のさぁ、やるど！

自動車を巡る最近の不幸な出来事から

いつものコラムとは趣を異にする内容ですが、かつて大学で自動車工学を専攻した者として興味を持たざるを得ない事柄なので、思うところを記すことにします。

今、生産台数世界最高を誇る世界に冠たるドイツの自動車メーカーの、環境性能を巡る大偽装事件の発覚のニュースが世界中を駆け巡っています。

これまでも、我が国のメーカーも含め、予期せぬ故障や部品破損さらには性能不達などによる、いわゆるリコールということは普通にありました。しかし、これらは設計上のミスや材料不良、加工不良など、確かにメーカー側がもっと厳密に管理や試験を行っていれば防げたという責任はあるものの、故意に為したものということではありませんでした。

しかし、今回の環境性能大偽装事件は、まさに確信犯として故意に為したものであり、どのような弁解をしても許されるものではありません。まさに企業ぐるみで技術者の良心を売り飛ばしたともいえるものです。少し解説しますと、車には排気ガス中の環境汚染物質を取り除く排ガス浄化装置が付いていますが、走行コントロールコンピューターのプログラムを工夫し、例えば車検の環境性能試験の時だけこの装置が動くようにし、試験をパスさせようとしたものです。当然、一般的な走行時には排ガス浄化装置は働かず、基準の３０倍もの有害物質を吐き出して走行していたことになります。

排ガス浄化装置の耐久性の問題や、浄化装置を通すと燃費や出力が低下する傾向にあることなどから、競合メーカーとの競争の中で優位性を保つためにこのような不正を行ったのではとの見方が一般的ですが、真相は近々明らかになることでしょう。

いずれ、長い自動車の歴史の中で最大の詐欺事件と言えるのではないでしょうか。これに携わった技術者は大勢いたことでしょうが、誰一人技術者としての良心を表すことができなかったのか不思議に思えますし、経営陣からの圧力であったとしても、いわば詐欺行為に当たることに手を汚すことは、人の命を扱う自動車生産に携わる技術者として絶対に許されることではありません。

私の大学生時代の恩師に、後に大手自動車メーカーの技術研究所長になった方がいます。学科一厳しい先生と言われた方で、歯車実験では何回やっても、「ダメ、こんなもんで車を動かせるか！」と怒鳴られっぱなしでした。

しかし、何回もやり直してようやく合格点を頂いた時に、その恩師はめったに見せない温厚な笑顔で私たち学生に「機械もいろいろあるが、自動車は直接人の命を預かる機械だぞ、高速走行中に歯車が破損したらどうなるか、当然解るだろう。」と語りかけました。

まさに技術者としての良心の大切さを教えて戴いたことを、しっかりと記憶しています。